

可愛郡守白公曰紫陽花と見えたり、歌に、よひらのはなとよめるは、花の四枚にさくをいふ也、唐あぢさゐあり、其樹たち葉もうつぎに似たり、尖あぢさゐともいふ、花の形による也、六月に咲り、草あぢさゐあり、秋花さくべにかたに似たり、よて草額ともいふ、

〔和字正濫抄〕中下のる

紫陽花 あづさゐ 和名かくのごとし、万葉には味狭藍とかきて、つねのごとく、あぢさゐとよめり、六帖も同じ、味はほむる詞、狭藍はさあるといふべきを、あを略していふ、たゞあるなり、あぢさゐの花は青ければ、かくはなづくるなり、万葉に、玉きぬのさゐく、沈みとよめるも、たゞく藍に入る、なり、

〔大和本草〕七紫陽花アツカイ 韻語陽秋曰、有山花、色紫、氣香、穠麗可愛、人莫知其名、白樂天標其名曰紫陽、

紀之以詩、其花テマリ花ノ如シ、淡碧色ナリ、其莖ハ木ノ如ニシテ、高サ二三尺ニスギズ、叢生ス、花ハ日ヲオツル、古歌ニアヂサイトヨメリ、順和名抄ニハアツサイト訓ズ、或曰、是常山ナリト、非也、常山ハ別物ナリ、又花ヒトエナルアリ、山林ニアリ、枝ヲサシテモ活ク、

〔難波江〕七紫陽花

萬葉集卷廿四十安治佐爲能夜敵佐久と有るを、六帖草の部にのせたり、さて萬葉集卷四五十事不問、木尙味狭藍と有り、これはたしかに木とよめり、但此歌一首の意解かぬれば、六帖にのせぬとあれたるからば、木尙とや、和名抄廿卷本には草部に紫陽花と題して、白氏文集を引證としたり、十卷本にはのせず、近日の本草薬名備考和訓抄には、木部に入て、花鏡を引て八仙花と有り、又物品識名にも、木部に遵生八牋を引て、聚八仙と有り、本草にはみえず、新撰字鏡に、草部、安止毛久佐、又と有れど、葎の字を安治左爲にあてたる據おのれ保孝、岡本いまだまらず、物産家にとはまほし、又一種ガクといふあり、アヂサキノ種類なるべし、漢名詳ならず、中世よりかくの花と歌によめり、字